

—懐しの人々—



—私の兄弟—

## 父 母 の 思 出

私は四人の男兒の長として生れ、専ら父母の愛撫を受け、農家に育ちながら一切の勤勞服役を免ぜられ、十五歳にして早く家郷を去り他國に轉々遊學し、業を卒へた後も意の儘に行動し來つたが、爾來六十年に近き歳月が過ぎ去り、片時も父母の膝下に安住しなかつた。

父母が亡くなつてから、既に三十年近くなるが、今でも時々事に觸れ幼時のことが偲ばれて自らの老を忘れることさへある。

私の生れ故郷は瀬戸内海に瀕した愛媛縣の東の端に位する僻地である。新體制の世の中になつても猶今に舊正月を墨守して居る農家にとつては、舊正月と云へば、秋收冬藏の農繁期を過ぎ一年中の最も閑散な季節である。随つて子供までも、お正月を迎えることは、何と云ふこと

なしに楽しく、待ち遠いものであつたことは、古稀を超えた今日でも忘れ難いものが残つて居る。

健康で平素朝早く起きる習慣の父は、元日の朝はまだ夜も明けない寒い星空の天を頂いて私を連れ出し、二ヶ所の神社に参詣するのが恒例であつた。往復で一里内外の行程であるが、途中で人に出會ふこともなく、淋しい冬枯れの薄暗い野道を、親子二人で殆んど無言で、十歳前後の私は寧ろ眠たさをこらえて、トボ／＼と父の後を追つて歩むのであつた。

東に明るい大きな星が出て來ると、父はあれは夜明けの明星であると説明してくれる。家に歸り着く頃漸く東の空が白くなるのであつた。

大正四年の十一月東蒙古の天然曹達探險のため、約三週間程、鄭家屯から洮南附近に旅行した。今日では四平街から鄭家屯を経て洮南から北は黒河まで鐵道が通じて居るが、その當時は長春から大連までの一本の滿鐵線のみであつた。

平砂萬里人煙を絶つ枯野原を、馬が十七頭、馬車が五輛、苦力を合せて十人の一群が、毎日

毎日參謀本部の見取圖を便りとして、天然曹達の露出地と思はれる方向へと、馬ではあるが遅延たる牛歩を進めた。北支や蒙古の旅の習慣として、朝のたび立ちには非常に早いのである。時には午前の三時に出立することもあつた。その代りに適當な宿所が見當ると、午後の二時頃にも行進を中止した。黄昏の頃遙か遠方に非常な速度で野火が燃え擴がる、所謂、遼原の火に一種の物凄い氣分に打たれる。途上時とすると、千を以て數える黄羊の大群が、一塊となつて、はてしもない荒原を移動して居るのを見出すことがある。全く人間社會と隔絶した天涯萬里と云ふ異域の感がせられる。

蒙古の夜の空は特に澄み渡つて居る。星の光りは燦々として、月のないのに月夜の感がある。曉近い頃には零下五、六度の寒さが身に迫る。時に行く手に狼の群が現われると、一番先に覺るのは馬である。忽ち馬が立往生をすると、我々も無言の儘で、狼が去り馬が靜かに動き出すのを待つのである。

東の空を眺めると、夜明けの明星は、小さな月の様に燦々として輝き、中天を指して、急いで上つて行くのが見受られる。忽然として雲邊山上を駆け上る。故郷の元日の曉の明星を思ひ出

した。忽ちにして亡き父と私の幼時が、あり／＼と腦底に去來する。止め難い熱い涙が頬を傳つて流れ落ち、脉々たる一種の靈氣と共に、元旦の父の姿が眼前に浮び出る。私の一生を通じてこの時ほど又懐しいと云ふ、感に打たれたことはなかつた。

明治十年前後はまだ交通機關の幼稚な時代で、數十里の道も容易ならぬ旅路であつた。僻陬の故郷の父老の一生一度の伊勢參宮は恵まれたる、あの世までの土産物であつたに相違ない。私の母も幾人かの村の同行に加つて、この楽しい參宮旅行から歸つて來た。六歳か七歳であつた私は、村はずれまで迎へに出て、暫く離れてゐた母が、陽にやけて、全く別人の様になつた旅姿を見た。驚きもしたが、又飛びつく様に嬉しかつた。それから幾日かの間は母の側を離れず、奈良の猿澤の池や、二見の夫婦岩の話や、數々の土産話に子供心を満足せしめた。

昭和十年の二月、私は四十年に近い教壇を退き、全く野人となつた。行雲流水久しい間の官場の塵を拭ひ去らんとて、その夏五人の家族を連れて、悠々自適の旅へと出で立つた。

伊勢の大廟を參拜してその夜は二見ヶ浦に一泊した。二見ヶ浦は私には初めてであつた。翌

日旅舎を立ち出た。恵まれた好天氣で又旅のこととて、五人の家族が悠々又嬉々として海岸傳ひに歩を進めた。忽ち鏡の様な靜かな海面に、思ひがけなく二見の夫婦岩が眼前にあらわれた。その瞬間實に電光石火の様に、亡き母が思ひ出された。何と云ふ感激であらう。あの陽にやけた旅姿で、その昔母も今私が立つて居る同じ場所から、夫婦岩を眺めたのであつたかと思ふと、自分の齡も、經歷も何もかも忘れて、六ツや七ツの幼な氣分が、全身に湧き返へつた。目には見えないが、一こと母に聲をかけたいと思ふ切なる懷かしさ、又はかない無量の感慨に、熱い涙より外には何物もなかつた。連れ立つ家族に氣がつくと、氣付かない様に、顔を隠すのに一生懸命であつた。

幼にして父母の膝下を離れ、他國に流轉した私には、無論風樹の嘆があるが、それは致方がない。併し萬里の空原、萬里の情に浸つて蒙古の曉空に父を追想し、四十年に近い官界の足を洗ひ、烟波に身を托し思はぬ旅路で母の思出は又特殊のものである。愛撫せられて、懐しい思出多い父母を持つたことは、私の終生の幸福であることを切に感ずる。(昭和十七年九月)

簞瓢食飲不嘆貧

六十餘年漂泊人

衰髮弗成名利客

童心猶未忘雙親

簞瓢食飲貧しきを嘆ぜず。六十餘年

漂泊の人。衰髮成さず名利の客。童

心猶未だ雙親を忘れず。

文部大臣岡田良平氏

學校創立當時の文部大臣は中橋徳五郎氏で、氏に依つて工業専門學校の大擴張が實施せられ



た。學校の開校式には、中橋文部大臣を迎へて、私は學校々則に掲げて居ない、我校の三無主義を説明して、舉式の挨拶とした。さすが實業界の苦勞人だけあつて、私輩末派の行動を齒牙にかけて居らない、三無主義であらうが十無主義であらうが勝手にやれとの態度で、私には嬉しかつた。

その後内閣の交迭があつて、岡田良平氏が文部大臣となつた。岡田氏は専門の教育行政家で、謹嚴莊重、且恪勤の人であるから、省中の屬官連も、之は油斷がないと一種の緊張を感じたに相違なかつたであらう。私も同じ緊張を覺えた一人であつた。岡田大臣の下では、私も三無主義じゃ、自由教育じゃと獨りガテンで、呑氣になつて居られないかも知れない。何時大臣から呼ばれて「お前の學校では變な事をやつて居る様じゃ、その様な事はまかりならぬ」と云はれたら最後であると、覺悟をして居なければならぬ。早速に文部省に出頭して新任岡田大臣に面會した。先づ大臣新任の祝ひの挨拶を一應述べて、短刀直入に私の學校經營の主眼たる自由主義を逐一解説して、大臣の答辯を待つた。私は別に辭表を懷にしては居ないが、大臣の答

辯如何に依つては、無論私は泰然として職に留まることは出来ないかも知れない。畢竟之は私の進退伺であつた。所が大臣は只簡單に、君ならば其れでやつて行けるであらうと答へられた。私の進退伺はわけもなく却下されたので全く意外であつた。私は岡田大臣は世間の噂の様に、頑固な人でないことに多大の好感を持ち、且つ安心して辭去した。

尤も私は岡田大臣とはそれまで全然相識の無かつた譯ではないのである。或時私の相識學習院長北條時敬先生から、當時私の勤務先であつた藏前高工へ電話があつて、若し差支がなければ、學校からの歸りに茅場町の偕樂園へ立寄れとのことであつた。行つて見るとその席に既に岡田、北條の兩先生が相對して居るのを見た。北條先生は岡田先生に向つて、この男は一騎打の名人であると私を紹介された。嘗つて私は仙臺の東北大學に、當時の北條總長を訪問したとき、兩三名の教授連が席に居合はせたが、總長はその方々に一騎打の名人であると同じ紹介の辭を以てせられたことがあつた。この一騎打の名人と云ふことは、かなり北條先生の腦裡に印象せられて居るものと見へた。他の場所に於て之が由來を述べたいと思ふ。蓋しこの言葉は私

に一種の罪惡を感じしむるものがあるからである。

偕樂園と云ふ料亭の一室でこの兩先生と相對すると、兼て噂に聞く二宮尊徳宗の好個のコンビなるかなと私をして直感せしめた。當時の私にはまだ多分に謀反氣が残つて居つた。尊徳宗と聞くと、如何にも頑迷固陋なる感をせざるを得なかつた。又しもこの兩先生から尊徳宗の洗禮を受けるのでなからうかと、多少陰氣になつた。私はその當時東蒙古に散在する天然曹達に關し探險旅行した直後のこととて、兩先生の需めに應じて意外にも一席の旅行談をしたのであつた。それから兩先生の世間話を聽いて甚だ愉快にお別れをした。岡田先生に直接相對して懇談をして見ると、世間で噂する様な頑迷固陋な感じが、段々と薄らぎ行く様に覺えた。岡田先生は用意周到な人である。又親切な人であり、教養のある人であり、信念のある人であり、親しみと人間味の豊かな人であると云ふ好感が、その後交際が久しければ久しい程與へられたと思ふ。その用意周到であることと、強い自信を以て居ることと、余りに嚴格であることと、教育行政に精通して居ることが、世俗をして一見頑迷固陋と誤解せしむることを思つた。

或る時の女學校長會議で一校長が文部省の劃一主義を非難した時、岡田大臣は文部省は地方の狀況に順應して實科女學校を設立せしめたが、それが今日の狀勢では、續々と高等女學校に劃一しつゝあり、劃一打破を裏切るものは、文部省よりも寧ろ教育家自身にあるにあらずやと痛快なる答辯をして校長連を沈黙せしめた事があつた。從來我國の教育は劃一的であるとか、官僚的であるとか、つめ込主義であるとか非難し、その責任を文部省に負はして居るが、私を見る處ではその責めは文部省よりも寧ろ學校長連にあると思つた。各種の學校長會議は、劃一主義、官僚的、つめ込主義の醗酵であると思はざるを得なかつた。

私自身はかなり長い校長の任期中、別に何等の不自由を感じず、文部省からの壓迫もなかつた。毎年會合する學校長會議は、慥かに劃一の發足所であり、官僚機構の製造所であるかの様に見へた。岡田文相は意識せられて居たか否やは詳にしないが、實科女學校問題は慥かに校長會議の弊を喝破したものであつた。横濱の自由教育を支持せられた文相に對して、私は敬意を表せざるを得ないのである。併せて以上の意味に於て文部省の代辯に甘んずるものである。

## 山 本 政 人 君

君は山口縣の出身で、廣島高等師範學校物理化學科を卒業後、中等學校の教師として世の中に立つた。教職にあるものは常に薄給に甘んぜねばならぬが、君には親譲りの借金があり、教職では中々やりきれないとの事で、私と相談して學校をやめて横濱<sup>セウ</sup>含密研究所に職を轉じた。同研究所は私が所長をして居たので、山本君のために新に過マンガン酸加里の製造を計畫し、君を以て製造の主任者とした。所が色々技術上の困難があつて、失敗に失敗を重ね、まだ製品を市場へ出すに至らぬ内に第一次世界戦争が終り、藥品類の價格が暴落したため、大損失のまゝ製造事業を停止した。餘儀なく君は東京へ引き上げ、暫く浪人して居たが、間もなく再び横濱へ來て、電車會社へ入つた。當時の電車は今日の様に市營ではなく、私設會社の經營であつた。君は東奔西走、時には近縣へ出張して車掌や運轉手の募集に努力して居つた。社に居ては

運轉手や、車掌の教育掛りであつた。

時あたかも商工實習學校の創立に際し、校長に擬せられた私が、適當な補佐役を必要とした。一も二もなく山本君を適材と考へ、早速會社へ交渉して、水戸方面へ出張中の同君を、電報にて呼び歸へして貰つた。電車會社の事務近藤賢二君は、私の京都同志社に於ける同窓であつたので、萬事は好都合に進捗したのであつた。それから君は特有の周到なる注意と熱心を以て、創立の事務を擔當し、僅か一ヶ月餘にして完了したことは、全く君の努力に待ちしこと多大であつた。私が校長たりし間は、同君は主事として、校長事務を代行し、創立十年後、私は辭職し、それより君は校長となつたのであるから、滿十ヶ年間私と共同勤務した。

私は明治三十八年から四十一年まで三ヶ年間、廣島高等師範學校にて教鞭を執つた時分に、山本君は私の學生であつた。私の長い學校生活の中で、廣島高師ほど私の性格に合はない、いやな學校はなかつた。山本君は四年間の教育で、可なり高等師範流に薰陶せられて居たので、生徒の訓育方針に於ては私と意見の相違は少からずあつた。私は別に苦勞と考へなかつたが、主事としての山本君には、多大の苦勞であつた事は申すまでもない。兎に角山本君は、教職員

間の事情に、生徒間の出来事に、又監督官廳たる縣廳との交渉事件に、周到なる注意を拂ひ、一方ならぬ苦勞をした。又中等の事件に付き、主事として獨斷にて處斷し難きため、逐一校長の私まで問題を持ち來るのであつた。その度毎に私は面倒くさく感じ、そんな事で苦勞する必要がなかりと、散々に批評して、最後には神經を愚鈍にすることは、校長たる資格の要諦である。主事又然りで、君は神經過敏であると説法をしたものであつた。

それでも山本君の奇妙な責任觀の強さは、高師的の流儀で、私と全然一致が出来なかつた。市内に當時多數の廣島高師の出身者があつたが、我等兩人の間に、面白からぬ意志の隔絶があるものと想像し、之等の有志者は我等兩人を招き、一夕酒でも飲んで、意志の疏通を作らんとして、その旨私に申出をしてくれた懇篤の人もあつた。我々兩人は長い間の、親子や兄弟の様なものであるから、今更その様な必要がないとて、その厚意を謝し、取止めにしてもらつたこともあつた。

歳月の経過と共に、君も段々に私の流儀に宗旨代へをして、神經を愚鈍にすることに修養を

積んだ。學校には學校自體の主義方針がある。些細の事まで縣の干涉を受ける必要はない。ほ  
うかぶりをして居るに限るよ。縣の學務部長などは精々二年の任期じやと、私の對當局政策は  
事實が證明するので、山本君も校長になつてから私に共鳴する様になつた。

晩年の或日君は私に向つて最早自分も退職の時期が來た様に思ふから、この際決行したいか  
らとて相談せられた。私は實習學校は他の縣立と異なり、特殊の點がある。又君の後任は實習  
學校の現教師の中から擁立したいものである。之は決して私情からではない。實習學校の現狀  
から見て私は左様に考へて居る。君にも意中の候補者があるであらうが、我々の間でトクと思  
考して、縣廳を納得せしむる必要もあるから、今暫く隱退を見合せ給へ、私はその時機を知ら  
せるからそれまで待たれよと答へて置いた。

それから約一ヶ年程へて山本君は私に又その問題を持ち出したので、私は好からうと言下に  
同意して、後任に村上泰助君を推し、萬事豫定通りに進行した。君の辭職は各方面に意外とせ  
られ、且つ非常に惜まれた。特に監督官廳である縣でも、君が中等學校長として稀に見る、出  
處進退の宜しきを得たものとして感服せられ、その辭意を納れ、更に君のために適當なる地位



を與へんと提唱せられた事は、君の最も光榮とする處であつたであらう。

君はこの地位を辭し、横濱高工富山校長の請に應じ、同校の教務主任となつた。實に適所適材、大いにその學徳と經驗を期待されたが、教務主任として未だ大いにその驥足を延ぶるに至らず、不幸にして病魔のため倒れたことは、實に惜むべきで、私としても残念至極であつた。

實習學校は市の富豪安部幸兵衛翁が死に臨み寄附したる百萬圓を基礎として創立せられた。

創立以來毎年九月四日の翁の命日には、君は若干の生徒代表を同伴して、翁の墓前に香花を供することを忘れなかつた。學校教育上の美事として私の感激措く能はざる處であつた。又學校と安部家との關係を密にすることに於て、周到なる用意を怠らなかつた。安部家も又學校に多大の關心を持たれ、毎年教師を大陸へ修學旅行に派遣する資を供せられた。君も在職中その資金で南支からヒリッピン方面まで見學旅行をしたことがあつた。

教育家としての君の業績を回顧して見ると、特に華々しいと云ふものはなかつたが、生徒と出身者を念ふ情に厚く着々としてその歩を進め、微塵も輕薄の跡なく、老子の所謂不言の教を

行ひ功成つて驕らずの名言に、思ひ及ばしむるものがあつた。特に私の眼に映する君の退職は公人としての出處進退の節にかない、實習學校長としての晩節を全ふしたるものと、私自身の事に感じ實に嬉かつた。君自身も満足した様に感ぜられた。君と相接して年と共に交情と敬意を加へた。私としては、死後更に敬慕の念を増すものである。君の薰陶を受けた實習學校の出身者及び關係者も、又同様であると、私は深く信ずるのである。

### 原 三 溪 先 生

歲月匆々三溪先生逝いて、既に一周年となつた。先生の逝去を悼みし日は、昨日今日の如くに思はれてゐるうちに、もう一年を経過したのであつた。

八月十五日先生を知る人々によつて、追悼會がホテルニューグランドに於て催され、會する者二百數十名の多きに上つた。先生の遺徳を偲ぶに充分であり、先生が存在が如何に偉大な

ものであつたかを證するものであつた。この日會場に充てた大食堂のステージには、三溪先生の絶筆と覺しき、晩年の大作であつた墨繪龍虎六曲屏風の一双が飾られてあつた。筆勢凛々として眞に生けるが如く、龍虎の威壓が紙面に生躍して、大家の風格が人に迫り、更に別人である偉大なる三溪先生に接するの感を起さしめ、低徊去る能はざらしたのである。先生の生命はこの龍虎の一双の屏風に確かに不朽に傳へられて居ると私は感激した。この夕、會衆を代表して、先生と親交の深い井坂孝氏が、一場の追悼の辭を述べられた。言辭切々、又壯重、先生を讃する最高のものであり、會衆は先生を偲ぶ絶好の悼辭として、深く謝意を表したのであつた。私は井坂氏の悼辭に更めて敬意を表しつゝ蛇足を加ふるの念歎み難く、爰に一文を草することゝした。

回顧すれば昭和十三年の十月の頃である。三溪先生と一日相對して色々時局の談話を交へた。その後先生から一通の郵便を受取つた。文面は次の如きものであつた。

恭啓仕候 過日は久濶拜顔殊に時事に付き御高説拜聽閑雲野鶴の老生も頓に活氣を覺へ不圖

も贅辯を弄し申候 家に歸り床上横臥せめて贅辯補正の意味に於て別紙の寢言書き直し申候  
何卒御一讀御一笑被下度只此れ先生に一讀を請ふのみ他人には見せ不申候 敬具不宣

此の手紙に添へて書簡卦紙五枚に、先生には全く珍らしく、鉛筆の細字で、時事に對する先生の意見書が封入せられてゐた。そのうち差支へのない部分を一二枚抜き書きして見ると

中國は疆土廣大に過ぎ民衆饒多に過ぎ、従つて東西人情風俗を異にし到底民を一政府の下に統治せんとするは頗る困難にして非常なる大人物の出現を待たざる可らず。假りに大人物の出現を見たりとするも由來彼れは封土の大を恃み、民衆の多きを矜り、自ら尊大にして東西の霸を任し、會稽の前辱を雪がんと慾し我れに反嚙し來るは決して遠きにあらざる可し。故に東洋將來の平和のためこの機會に於て之を二分し或は三分するに如かず。

先生は達觀斯く言はれた。又、中南華に對しても既に遠く見透しをつけて、斯く論ぜられてゐる。

華中と華南とは列國の權益錯綜するのみならず、人心亦華北と異り古來謀を好み辯を弄し叛亂的素質を有する人民なれば寧ろ名實共に獨立國となし適當の人物（假令親日派の汪兆銘氏

の如き人）を擧げて政府を組織せしめ、その政府と攻守同盟を結び同時に利權の優先權を確認せしめ、その軍備内政等には一切容喙せず獨立國の名實を完からしめ彼等の反感と復仇の念を消散せしむるに務むべし。

と言ひ切られてゐる。又特に廣東に對しても筆を進められてゐる。

華南の中で廣東は民國政府の四川雲南等の門戸なると英佛諸國の東洋根據地と接攘するを以て、軍略上必要ありとせば是れ又公然日本の領土とするを要す。

と斷ぜられ、又早晚利害の衝突を免れ得ざるは英國であると言はれて、その對策を縷述せられてゐる。

先生は中國の歴史に蘊蓄の深かつたことは、常々の對談中にも窺はれ日頃敬服したところであつたが、先生の抱負は華北を充分に手中に入れ、華中華南は各國の利害の錯綜せるところであるから、これは華北と異なつた状態に置くと言ふことは、當時の考へ方から言ひ、又今日の情勢から考へても、確かに一見識であることは言ふまでもない。又先生の手紙には米國に對す

る外交上の見解も記載せられてあつた。私は中國問題に就ても、亦對米外交に就ても、先生とは可なりの相違のあつたことは、相互によく諒解してゐたところであつた。それにも拘らず先生とは幾回となく膝を交へて懇談をする機會を與へられたのであつた。この先生の芳情に對しては染々私は感謝し、又當時を想起して、先生を悼むの情湧然たるものがある。先生の逝去は横濱市にとつては、大木の倒れた思ひがせられるのであるが、私個人にとつても、それ以來一層の寂寞を感じられてならぬのである。このことがあつたのを契機としてその後幾度となく、先生とはホテルニューグランドで晝餐を共にしつゝ、又食後長時に亘つて時局特に中國問題に就いて論じ合ふたのである。その頃再び先生から小包のやうな郵便を受取つた。それは巻紙二間有餘に達する頗る長文のものであつた。その手紙の後尾に添書きがあり、この手紙を読み終れば焼き捨てゝ貰ひたいと書いてあつた。併し私は燒棄するに忍びずしてそれを保管した。若し必要があれば何時でも燒却し得ると言ふ考へであつた。私は今夏又再讀したいと思つて、所在を探し求めたのであつたが、遂に發見することが出来なかつた。或は私が先生の命を奉じなかつたため、先生の靈が私を導いて不覺の間に之を燒却せしめたものではなからうかと、不思議

な感がせられるのである。

徳富先生が三溪先生の逝去後、東京日々紙上岳麓雜記中に、三溪先生の死を悼み、

原三溪翁は横濱に於ける財界と言はんよりは全般的の長老であつた。その風采は何んとなく、西園寺陶庵公の壯時を思はしむるものあり、思慮があり、學識があり、教養もあり、世間の實業家と稱せられる仲間では實に鷄群の一鶴であつた。又美術の蒐集家として又書畫等に素人離れのした腕前の持主であつた。

と書かれてゐる。短文ではあるが、流石に蘇峯先生だけあつて、よく三溪先生の全貌を盡してゐると思ふのである。私は先生の生前三十年の昔から先生の風姿に接してゐたが老公の壯時はこれを知らない。然し小泉三申翁の「隨筆西園寺公」を讀むと、蘇峯先生の言はれる如く三溪先生と老公の壯時は如何にも似通つてゐたであらうと想像せられるのである。三申翁は晩年老公を屢々興津の坐漁莊に訪れて、公の生立ちから晩年に至る迄の色々な事績を問答して、この著を公にしたもので、その間の應接の有様もよく書き現わされてゐる。

三溪先生と私が屢々應接した時と、それを對比して見ると、單にその風丰のみに止らず、その心境に於て酷似するところが頗る多いのである。言ふまでもなく老公は我國に於ける大元老である。政變のある毎に公の盡された功績の偉大なることは何人も知るところである。併し三申翁と相對座して語られるところを見ると、そこに何等政治上斯く重要な地位を占められる人とは考へられぬほど實に悠々迫らず、自らの生涯を語つて居られる。

高踏逸人と言ふ感は全く、公に於てこれを見るの感がするのである。この一點は特に三溪先生と老公の共通するところであると考へる。三溪先生は何時如何なる時でも、浮世の景氣や不景氣の風が何處を吹いて居るのやら知らぬものゝやうであつた。先生に遇つてゐる時、一度としてそんな氣配を窺つたことはなかつたのである。勿論先生は生絲貿易の巨商であり、景氣不景氣に超然たり得る筈はないと考へつゝも、ついぞその表情さへ感知することが出来なかつた。先生が常に胸裏深く何事も疊み込まれて、顔色に現わされず、水の如き平靜さを持してゐられたあの修業の深さは敬服の外なき事であつた。分けて關東大震災に際して、未曾有の災禍に遭遇されたに拘らず、その態度悠々迫らず、平素と何の變るところがなかつた。然し一度復興



俱樂部を結成して、横濱市の復興のため會長の椅子に就かれた先生は、その發會に烈々火を吐く大演説をせられて、並居る會員をして思はず、感激の涙に咽ばしめた。先生の深く藏せられてゐた氣魄が始めて外に現われ、火華となつたものである。先生はこの時まで、自ら決して社會の前線に立つことを極力避けられ、何等の名譽ある職務に就かれたことはなかつたのであつたが、この横濱が沈むか浮くかの大難の瀬戸際に當つては敢然陣頭に采配を揮はれたのであつた。この先生の悲壯な決意が、今日の横濱復興の大任を果した最も大きい力であることは言ふまでもないことである。當時先生の悠然たる態度の裡に牢固抜くべからざる氣概を示されたあの面影は、私の初めて見た先生の半面であり、強い印象を受けたために、今日も猶腦裡を去らぬ思ひ出となつてゐる。

三申翁の如く老公に接近した他の一人は、竹越三又氏である。氏は又その近著「三又小品」に於て老公を語つてゐる。

「自分は元來陸奥宗光伯の門下生であつた。ところが伯は肺病のためいつも寢てゐた。伯は

自分はもう永いことはないから、君を西園寺公に紹介してやらう。そうすれば君も満足することであらう。公は自分の觀たところでは、天下第一の高人である。これ位の人物はまだ會つたことはない。」

と言はれた。こんな經緯から老公に面會してもう四十餘年老公に従遊してゐるが、當初陸奥伯の言はれた高人と言ふ評語は洵に適評であり公の評價はこの一語に盡きてゐる。——と三又氏が書いてゐる。私の三溪先生に對する感じは亦この高人と言ふ點に於て、三又氏の老公に對するものと偶然相一致するのである。更に三又氏は言つてゐる。

「昔から君主に仕へる三つの道がある。その一つは權力を好み、そうして自分の權力を擴張して行こうとする者でこれを權臣と言ふ。第二は君主のために又國家のために、こうしなればならぬと思ひながらもそれを曲けて君主の意に迎合する者で、これを寵臣と言ふ。第三は君主に媚びず、御機嫌もとらず只管君主と國家のためによいと信ずるところに直往邁進し、時には君主を諫め、時にはお氣に入らぬ事も申上げる。そうして専ら皇室と國家のために盡さんとする者、これを純臣と言ふ。西園寺公の意とするところは、この純臣である。」

と三又氏は斷案を下してゐる。

三溪先生が横濱の長老として、長い年月に亘り、採つてゐられた態度を、靜かに追想すると、三又氏が老公を評した純臣の一語がそれであると考へる。斯く考へると、三溪先生は奇縁にも、同じ雅號に三の字を頭字とする三申、三又兩氏を通じて西園寺公に深い緣由が結ばれてゐるのも不思議である。井坂氏が追悼會の話の中に、當年の大宰相桂公が、三溪先生の人物に敬服して、先生をその傘下に收めやうとしたのであつたが、先生は不離不即の裡に遂にその一翼たることを避けられたと述べたが、これは先生が岐阜の出身であり薩長の人でなかつたためであらうか、或は先生が高人であつたためであつたか、私の想像を許されないところである。蘇峯先生は三溪先生を相貌に於て老公と酷似せりと言はれ、三申、三又兩氏はその性格に於て、老公と相通する點を證明せられてゐる。三溪先生は高踏逸人或は高人として陶庵老公と一派相通すると共に又老公の如く鬱勃たる憂國の熱情を胸底奥深くかくして居つた。その一度溢れ出たのは大震災により廢虚となつた我横濱を見た時であつた。今時の中日事變を見ては猶一層の熱情を沸騰せしめたに相違ない。只殘念な事には最早先生の健康が許さなかつた。其等の事から其

片鱗を會談により又書狀により私に示された事かと察すると實に私を愁殺せしむるものがある。先生を喪ふことの如何に損失大なるものであつたか、今更の如く惜まれてならないのである。一周忌に當り再び所感を陳して故三溪先生の靈前に捧ぐる所以である。

## 韓 國 人 李 誠 七 君

昭和二十二年の夏、何人の紹介もなく、突然韓國人の來訪を受けた。用件も不明であるから、面會したくはなかつたが、取次ぎのものから風貌言語は一紳士であるとのことで、應接間に請じ、ねんごろに來意を訊ねた。之が李誠七君であつた。六十四五の老紳士で、言葉にかなり聞き取り難い、アクセントがあるが、洗練せられた、見事な日本語で應酬せられた。

李君は高工の校内に建立せられてある、名教自然碑を見、それから思ひつき、自分も一記念碑の設立を計畫中であるので、その碑文と揮毫を私へ依頼したいとの事であつた。李君の語る

記念碑の由來は、次の様なものであつた。

かつて横濱市に村尾履告と云ふ、海軍の老大佐が居た。大佐は妻子もなく、身よりの親戚もなく、全く孤獨の生活をして居つた。平素韓國人に關心を持ち、その厚生福祉のため、献身的な努力を惜まず、大佐の住宅は絶えず、朝鮮人の集合所であつた。かの大正十二年の關東大震災の時、不慮の災害に逢つた韓國人無緣佛の爲、三ツ澤の市營墓地に私費を投じて、碑石を建立し、その冥福を祈つた。一方當の村尾大佐は昭和二十年の戰災で、家宅を失ひ、翌二十一年に病沒した。村尾大佐の墓石を建立するにつき、その墓地は狹隘にして、大佐の遺骨を無緣佛の碑に納むるの外、余地がないのである。遺骨が無緣佛と同居することは、大佐の遺志ではあつたが、それは忍び難き事である。依つて自分は在留韓國人の間に奔走して資金を得て、菊名の蓮勝寺境内の墓地を相した。依つて無緣佛の碑を菊名に移し、更に一碑を建立しその移轉由來を石に刻し、村尾大佐の徳を長く傳へたいとの事であつた。

初対面ながら、李君の誠意のこもつたその由來を聞くと、考慮するまでもなく、即座に快諾

をせざるを得なかつた。

それから幾回ともなく往復し、碑文と揮毫が出来上つた。所が意外な故障に出くわして、李君を當惑せしめた。村尾大佐の死後は、大佐と何等血縁のない一女性が相續人となつた。この相續人は無縁墓の移轉を承知しないのであつた。李君は今更の様に迷惑して、私への對策の相談を持ちかけて來た。私の注意により、市の當局者を煩はして、相續人を説得せしめたが、それでも客易に承諾を得ないので、益々窮境に陥つた。余儀なく私は出馬して、村尾大佐の功勞を賞讃し、記念碑の撰文から、私の身の上話までして、漸く相續人を説服して承諾を得た。

翌二十三年の一月に、建碑の除幕式が舉行せられた。その準備のため李君は尠からず東奔西走に骨を折つた。先ず知事や市長から、弔慰文や花環を貰ふことであつた。これには私も李君の後について知事、市長に面會懇願した。又除幕式には、東京に駐在してゐる韓國外交團の代表を初め、韓國の在日諸團體の代表など五六十人と、横濱の名士二十名程が参加し、式後には

お寺で酒食の宴を張るなど、盛大に舉行せられた。全く李君が獨りで斡旋せられた觀があつた。その後一ヶ年ならずして、李君の奔走と努力に依つて、村尾大佐の墓石が建立せられ、之も又私の撰文と揮毫にて除幕式が行はれ、この時も知事市長の弔慰文や花環にてその式を飾つた。

今一つ李君の奇特な行爲に就き記述したいことがある。

戰前米國人にてコーベルと云ふ宣教師が、當地の關東學院で教鞭を取つて居つた。この人は私には全く未知の人であるが、平和非戰主義の人として、戰時中軍部から逐はれて日本を退去し、比島へ赴き、マニラ大學の教師となつた。日本軍がマニラを占領したとき、コーベル夫婦も捕えられて、二十數人と共に所刑せられた。所刑に先だち、一時間の猶豫を求めて、コーベル氏は二十數人のため、一場の説教と祈禱を捧けて、從容として刑場の露と消え失せたとの事である。この報が米國へ傳はるや、當時コーベル氏の一女が、米國の某女學校に勤務して居つたが、教鞭を投げ捨て、日本人の捕虜收容所へ轉勤を求め、其處にて亡き父母の志を繼ぎ、捕虜となつた日本人のため、奉仕しつゝありとの報が李君へ傳はつた。

李君はかねてコーベル氏とは懇意の間柄であつた。別れに臨み李君の手を堅く握り、平和の日が到來すれば日本で又再會せんと約したが、終に歸らぬ客となつたことを悲しみ、李君はコーベル師夫婦の故舊知人と、進駐軍の宗教關係者を招き、昭和二十三年の一月、關東學院で追悼會を開催した。

私はコーベル師の人となり聞き、追悼會の記念撮影を贈られ、慇からず感激した。

李君は三十數年前日本に到來し、孜々として生計を営みつゝあつたが、日本に於ける韓國人の生活狀態に不滿の情を起し、方向變換して、韓國人のため社會事業に身を投ずるに至つたのである。李君は日本へ渡航して以來、一度も歸國してゐない。母國には五、六人の孫もあり、親戚故舊もあるから、一度歸國したいと時折り私へ洩らして居たが、昨今は經濟上の事情が許さぬから、歸國を諦めて居るとの事で、私も聞いて氣の毒な感じがする。村尾履吉氏の如き又コーベル師の如き、人道主義の實踐者が一般民衆の敬慕の的となる様な日が、一日でも早く來ることが望まれるのである。



## 傭外國人教師レーゲンス・ブルゲル君

明治時代には政府の顧問として、各省に傭外國人がゐたことがあつた。文部省には多數の外人が聘用せられて、多くは帝國大學で教授に當つた。醫科大學のベルツ先生とか、文科大學のフロレンツ先生とかが今猶私の記憶に存する。

處が日本の學術が段々と進歩して、高い俸給を拂つて最早外人を雇用する必要がないと言ふことで、明治三十年頃私の在學中には、文科の外國語教師を除いては、法科・醫科・農科にも外國人教師はなく、只理科大學の化學科に一人の英人ダイヴァース先生のみとなつた。ダイヴァース先生は長い日本滯留中に幾多の貴重なる研究を完成し、世界化學界に於て著名の學者となり、大英帝國王立學會の會員まで推薦された。私が化學科の一年生の間先生に師事したが、二年生になつた初め明治三十一年に最後の外人教師として歸國し去つた。

私は今も猶大學に於けるダイヴァース先生の化學の講義よりも實驗の指導が甚だ有益であつたことを深く感じて居る。又私の獨逸に留學中にも同じ感がせられた。獨逸の大學諸先生の講義は何等難澁ものではなかつた。別に參考書を求めて検討する程のものではなかつたが、講義に必要な説明は實驗を以てせられた。その實驗の裝置と材料は屢々私を驚嘆せしめたものがあつた。従つて實驗場に於ける指導は甚だ懇切であつた。兎に角科學教育に於ては、歐米學者に一種特色があることを感じた。何故に我國では科學教育に外人を招致しないかと言ふことに疑問を生じ、且つ之を遺憾とした。學問に國境があるべき筈がないのである。我國の學術は進歩したとて獨善であつてはならない。

私が横濱商工の校長就任の際から、この外人教師のことが念頭から去らなかつた。やつとのこととで文部省の了解も得たし又外人官舎新築の許可も得た。併し傭外人の人選には私自身で當ることが出来ないので、當時東大から隱退して獨逸に居住せられた、恩師池田菊苗先生を煩はし人選して貰つたのが本題の主人公レーゲンス・ブルゲル君であつた。

君は近世化學創建者オストワールの高弟ブレディの門下で、まだ二十余歳の青年で、つまりオストワールの孫弟子であつた。シベリヤ線で初めての東洋への旅路を無事に下關に到着したとの電報を私は受取つて、横濱驛に彼を迎へて、予定のニューグランドホテルへ案内した。

その日午後彼を學校へ連れ行き彼の爲に新築した官舎を見せた。彼は大いに喜んで明日からこの官舎に移りたいと申し出た。官舎には寢台が既に出来ていたが、寢具、その他炊事の用意が整つていなかったので、今十日か二週間位ホテルで暮らして貰いたいと勸告したが、今のままで至極結構であるとして中々聞き入れない。時は五月の新緑の候で、余り寒さを感じないから、寢具が無くとも持ち合せの毛布にくるまつて寝るから差支へがない、食事は又云々と色々説明して、結局翌日から官舎に移ることゝした。餘り氣の毒と思つたから、貸蒲とん屋から粗末な敷蒲とんを貸りて來てやつた。そんな次第で折角無理をして空けて貰つたニューグランドを僅か一泊で引上げた。恐しい節約ぶりに少なからず私を面くらはした。

取敢へず官舎の隣りに居住する學校の雇人夫婦をして、レーゲン君の世話をさすことゝした。

この夫婦の作つた味噌汁や、漬物の純日本食で辛抱した。パンや果物類は獨和辭典と首引して、使をやつたり自分で買ひ出しに行き、何事も大した不自由もなく、獨身生活を營み得るに至つた。全く慣れない日本の食と住に、又日本人以上の簡素生活に平氣であることは、私には全く意外であつた。

三年後の夏、休暇を利用して獨逸に歸省して結婚し、印度洋經由の新婚旅行で歸校した。家庭が出来た爲、私は時々晚餐に招かれた。レーゲン君は猶太人であり、又猶太教の熱心な信者であつた。猶太教の嚴格な信者は、鱗のない魚類を食はないのである。又牛乳山羊乳を飲んで、その肉は食はない。鶏卵は食しても鶏肉は食はないと云ふ、奇妙な戒律である。私からえびや蟹又は鰻が如何に美味であるか、日本人にとつては、魚介中の珍味であるから、是非試食せよと屢々勧誘したが、宗教上の慣習を固守して聞き入れなかつた。私は彼から猶太教信者の日常生活に於ける、色々珍しき風俗習慣を教へられた。

緊縮主義の若槻内閣がドル買のために倒れて、金再禁止の大養内閣が生れると、經濟界にインフレの起る杞憂を抱くものが出來て、新聞紙上を賑はした。一日レーゲン君が私を訪れて、インフレ問題につき彼の憂慮を訴へ、是非この際辭職して米國へ行きたいから承認してくれと申し出た。私から色々説明されて、やつと納得して米國行を思い止つた。

第一次世界大戰後の獨逸の大インフレ經濟を、レーゲン君は自身からつぶさに體驗したので、インフレーションの噂を聞いただけでも、彼は震い上らざるを得ないと見へる。實に無理ならぬことであると、私には能く分かるのであつた。猶その際私は彼に向つて、君は所有金を銀行に預金してあるやと聞けば、彼は弗買ひをしたと答えたので、私は少からず彼の利財の敏感さに驚いた。

私は外國に滞在中、猶太人の性格につき、多少の見聞した事柄があり、又書物に依つて特に猶太人の事は讀んだものであるが、レーゲン君も猶太人として私の關心の目標であつた。

猶太人は世界の國々で嫌はれたり、迫害に逢つたり、甚だしきは追放までせられた。彼等民

族は安住の國土を持つて居ない。その様な不安な潜在意識からであらうと思はれるが、彼等は自由に住み易い國土を選択し得るに便利なるため、特に金錢を偏重するのではなからうか。猶太人から世界に卓越した科學者・藝術家・富豪等が多數輩出して居るが、農業經營者としての成功者や、又農業に寄與する研究家のなき事などは、それ等が原因ではあるまいかと、私には想像せられるのである。

何は兎もあれ、レーゲン君は好人物であつた。學生の指導もよくせられたのみならず、學校外にも必要な人物となられた。それは各大學等で若い學者が、その研究事項を獨逸文にて發表するのに、レーゲン君の助力が必要であつたためである。

レーゲン君はヒットラー政權の出現と、その興隆を最もにがにがしく思つてゐたらしかつた。レーゲン君が我が國に在留しながら、本國に於けるヒットラー政權の猶太人迫害から自分の財産管理に極度の不安を感じて居つた。中日事變が段々深刻になるにつれ、何物か自分の身邊に迫る不安が次第に濃厚になる様に感ぜられ、終に意を決して我が國を去つた。私は非常に氣の

毒に感じたが、多少の内情を知る私には慰留するだけの勇氣がなかつた。或はこれは去るの絶好の機會であつたかも知れない。去つて彼の向う處は、猶太人の新本國パレスチナであつたが、西航の途中から、只一度の便りがあつたのみで、今だにその消息が知れない。私は絶えず及び彼の家族を記憶してその幸福を祈つて居る。

## 中 村 房 次 郎 翁

私が中村翁と相識の間となつたのは、大正二年以來で、昭和二十年翁の死去に至るまで、三十餘年の長きに涉り、知遇を忝ふした。翁は我高工創立主唱者の第一人者であり、創立以後死に至るまで、高工商議員として、學校重大事件に參與せられた。忘れてはならない學校の恩人である。

翁の死後、空襲熾烈の日、盛大なる追悼會の催しがあつたが、當日私は追悼の辭を呈する機

會を得ず、その後一文を草せんとしたが、慘澹たる戦局が事志と違ひ、荏苒終に今日に至つた。感激したことは、その當座でなければ、私の凡筆では、到底その意を盡すことの出来ないのが遺憾である。

翁は政黨から生れ出た様な人であつた。従つて選舉運動ときては、全く寢食を忘れて居るかに思はれた。翁は自ら候補者として立てば、貴衆兩院何れでも、又何時にても、苦もなく當選し得らるゝであらうが、終生議場には立たなかつた。翁は民政黨の人で、民政黨の議員を作る人であつた。立候補者は黨の公認候補者であるよりも、中村公認であることは、より必要であつたらしい。民政黨が苦節十年であらうが、如何に凋落しようが、終始一貫翁は民政黨のために盡した。黨のための消費した翁の金錢は、莫大のものであつたであらうが、寸毫の利權を求めないのみならず、全く知らぬ顔をして居つた。知らぬ顔よりも、寧ろ隠さん許りに遠慮して居た様に見へた。

これが翁の民政黨から重視せられた所以であつて、頻々と日本俱樂部に出入した私に、その消息が能く知られて居つた。私は元來政友會色彩を帯びたもので、翁とは反對の立場に居つた。



横濱に於ける關係深き周圍は悉く民政黨の人々で、大けさに云へば、私は全く四面楚歌の聲の裡に終始した。原三溪翁とは超然として、世事を懇談したが、中村翁とはそれが出来なかつた。しかしお互ひに能く理解して居つたから、減俸問題のことの外は、萬事が至つて圓滑であつた。

横濱舍密<sup>セキ</sup>研究所は、翁の設立したものであつた。翁のブレーン・トラストの一人金慶吉君の寄與も又尠からずと思ふのである。横濱の有志の計畫した、空中窒素固定事業が、世界第一次戦争のため頓挫するや、翁は化學研究所を設立して、斯界に貢獻せんと志した。翁は横濱貿易港の背後には、生産工業の大發展を、兼てから期待切望して居つたので、研究所の設立は、その素志の顯はれの一端と見るべきであらう。

翁は非常に用意周到で親切な人であつた。高等工業の卒業式には、必ず來場せられ、恒例による講演名士の招待晚餐會の世話までせられた。何かの差支へで翁が晚餐會に出席の出来なかつた際には開宴の前にホテルに來られ、私に協力して、主なる來客の坐席の配置にまで世話をしてくれた事があつた。如何に我校に對して盡されたかを知るべきである。

大正九年世界大戰後の財界パニックは、翁の主宰する増田屋商店を吹き飛ばした。翁は全く世間から身を隠くしてしまつた。それから滿三ケ年にして、大正十二年の關東大震災は、横濱市を灰燼にした。震災の直後翁の安否を知るため、私は翁の避難所を野毛山の一角に探がし當て、翁に面會した。翁は俄か作りの小屋から、外に出て來り、鈴木さん自分は裸であるが、横濱の市民も皆裸になつた、わたしもこれから世間に出て、裸一貫で働いて、市の復興のため努力すると、翁は全く生れ代つて意氣昂然たるものがあつた。私も翁の發奮に、少からず感激せられた。それから原氏等と共に、横濱復興會を起し、市民を總動員して、横濱復興の端緒を開いたことは、大功績と云はねばなるまい。横濱復興と共に、増田屋商店も復興し、翁は全く名實ともに還元した。

翁が再生後、最も精力を集中したのは、岩手縣の松尾鑛山であつたであらう。松尾鑛山は當初微々たる硫黃採掘所であつたが、次等に發展して、桃源郷に人口一萬を擁する都市となつた。昭和十四年十月十日突然抗内に、大落磐を起し、百名近くの犠牲者を生ずる大珍事が出來

た。當時神戸に商用滞在中であつた翁は急遽歸東して登山した。私も慰問かたがた同伴した。事件一ヶ月後に、鑛山で慰靈大供養が催された。その際人を介して私に、老體氣の毒に考へるが、今一度山へ同伴してもらいたいとの申込みがあつたので、私は又同行した。何故に私の同行が必要かと云ふことは、私は兼ねてから能く想像して知つて居つた。この事件に就ては、翁はちやんと結論を持つてゐる。幾ら他から慰藉を受けたとて、その厚意と同情には感謝をして居ても、その結論を補足するものではない。或は一層憂愁を加へるものかも知れないであらう。私と相對すると、慰藉はくり返へさない、災禍に直面して、損失や打算の邪念を去り、誠意と同情を以て、事業家の眞劍味の態度を、發揮する絶好の機會であると、私は激勵し主張するのである。これがこの場合に於て、むしろ翁の慰藉となるのである。私は單に翁の結論を豫知して、それに裏書きをしたものに過ぎなかつたのである。

三溪翁の没後、翁のあとをつぎ、中村翁は時々私とホテルニューグランドにて午餐を共にし、懇談しようとして約束してくれた。三溪翁を失くして、浪人の私は一層寂寞を感じて居ることとて、非常に喜んで快諾した。あのセツカチな翁が、私の様な暇人と、時々會合したいと云ふ考へが、

どうした風の吹きまわしかと、多少不思議にも思はれたが、果して僅か一度で中止になった。それは無理もない事で、翁は非常に多忙の人であつた。絶へず東京へ往復して居るが、驛のホームで電車や列車をボンヤリ待つことがない。發車時刻ぎりぎりに駆け付ける、乗車の時も、降車の時も、改札口から、ホームまで、ホームから改札口まで、上半身をつき出して、前進機關である下半身を、おいてけぼりにするかの様に急がれる。あえぎながら後から追ひ行く私から冷かされることも、時々あつた。

或時私は事業を計畫し、その目論見書を翁に示し、その賛同を求めた。動力として石炭を要し炭質として樺太炭を必要とした。翁は樺太炭を得るためには、政黨の力を借るより、外に途がない。所謂利權問題であるから、自分としては、この問題に觸れたくないとして拒絶した。利權問題に關する、私と翁との接觸は、只この一事であつたが、他は押して知るべしであると思ふ。翁は眞の意義に於て、紳商であつたと私は信ずる。横濱の他の有力者も、同様であつたと、私は信ずるのである。

大正昭和の間に於て、大小の事業家や、政治家は、政黨を利用し、利用されて、利權問題に没頭し、幾多の疑獄を惹起し社會を荼毒せしめ、その結果軍人政治を餘議なくせしめたものである。横濱には利權問題に關しては、一人の容疑者さへ出なかつたことは、市の誇りとして、又市民の光榮として、差支へはなからう。

一面横濱は帝都に隣接する五大都市の一として、教育としては大學なく、政府事業としては、一生絲檢査所のみにて、海陸空軍の施設なく、その他中央政府の事業に、全く關連することがなく、港一つにその繁榮を依存して來たことに、多少孤獨を感じざるを得なかつた。慥にその嫌いがあつたと思ひ、私も惜むべき次第であると言素感じて居つた。

横濱政治家の開山島田三郎が、時の海軍造艦問題に關し、コミッション事件で、帝國議會に於て、一人舞台の獅子吼して山本内閣を仆し天下の耳目を聳だてた傳統は、いつまでも横濱に残つた。翁は慥かにその傳統の代表者であつたと私は思つて居る。或る事件で私は翁と對談中、餘りにも、翁の偏執に對し、今少し清濁併せ呑むの寛容を示して貰ひたいと、懇望したことがあつた。それから暫くの間、私を見ると清濁併吞の言葉を使つて、私をからかつた時代があつ

た。翁の徳を賞讃する人は、翁が市に残した事業を、指すものが多いが、無論異存のあるべき筈がない。併し私は翁の大功績は、市を淨化したことであらうと思ふのである。従つて市政には漬職事件が稀れであつた。又私の知る限り、歴代の市長は廉潔の人であつた。同氣相求むるの結果であらう。開山島田政治家の傳統の利害得失は別として、其所に私と一脉相通するものあることを喜ぶのである。

私の書齋兼應接間の壁に、明治神宮聖徳記念會館に保存してある繪畫の寫眞の一つが額にして、掲げられて居る。明治の元勳岩倉具視公の病床に、明治大帝が臨幸して、御對面お見舞して居られる場面である。翁はこの額を一見すると、あなたもこの寫眞を掲げてゐるかと、他を言はず、只この一言で眼中に涙を湛へて居つた。私はそれを見て、急にもらひ涙を催し、兩人黙々直ちに用談に轉じたことがあつた。翁は非常に強い、所謂戰鬪力の持ち主であるが、同時に多情多感の人であつた。唐の魏徵の人生感意氣、功名誰復論の詩句を想起せしむるものがある。従つて知人に對する同情心と親切心は實に濃かなものであつた。蔭の行爲であるが、私への翁の親切心で、終生忘れ得ぬ、事件は二つあるが、多少遠慮を要するので、茲には割愛する。

國際的俱樂部にロータリーと稱するものがある。井坂孝氏の肝入りで、或年横濱ロータリーが生れた。勧誘せられるまゝ何氣なくこの俱樂部に私は入會した。所が毎週一回の會合を催し、その都度出席がとられ、缺席が幾パーセントに達すると、退會の宣告を受ける、嚴しい制裁であることを知つた。生徒の出勤を取らない學校長が、出勤を取られるむじゆんは、滑稽千萬のことである。とんでもない會へ入會したもののじや、それに食卓では茶も飲めない、水許り飲む、水は嫌いじや、その上英語のロータリーソングを合唱しなければならぬ。君が代さへ獨唱出來ない私には、總ては不合格であると間もなく退會した。ロータリーのモットーは社會奉仕である。どうも薄い宗教の香がせられる。宗教の威力のない今の世で、この様な團體に歸依するのが、インテリ人心の傾向かも知れない。さらばロータリーへ入つて、開祖ポール・ハリスを拜むより、二宮尊徳でも拜んでゐる方が、氣がきいて居るかも知れない。そんな理窟よりも、長いものに捲かれる、アメリカドルのエキステションとも見做すべきかと、井坂氏へも、日本の開祖米山梅吉氏へも、特に文書を以て抗議した。

中村翁は當然會員であるべき筈であるが、入會してゐない。私はほど翁の心中を察して居た

ので、早速翁を訪問して、私の脱會の理由を述べた。所が私が豫期した程は痛快に、感じてくれなかつた。それから可なり長い月日の後に、翁はロータリー俱樂部に入會した。四圍の事情からして、餘儀なくせられたことと、私は充分に察知してゐたものの、翁としては、私へ知らすことは、實に苦しかつたらしい。その様な事は實に一小些事で、氣に留める様な問題でない筈であるが、其處は翁の翁たる所以で、その後暫くの間、私と會合する毎に、ロータリー問題は、翁の頭から離れなかつた様に見へ、むしろ氣の毒に感じた。

翁は中背肥滿で、私の初めて知る四十台から、殆んど一本の黒髪を混へざる白髪で、色艶かの好い赭顔と相映じて、好個の美丈夫であつた。昭和十四年の山の落磐前後から、翁は高血壓を病み、その一高一低を氣にせられ、絶へず醫者を手離さなかつた。私と山へ同行するにも、醫者は必ず隨行した。昔はお寺の前には葦酒山門に入るべからず、との石標があつたが、あなただの門には、醫師これより入るべからずの制札を立てゝもらいたいと、醫師を遠ざける忠告を幾度となく、くり返へしたが、信ぜられなかつた。昭和十九年九月二十四日翁は遂に腦溢血で長逝した。私より長すること一歳、三溪翁は猶三歴の長であつた。兩翁逝いて私は一層の寂寞



を感ずるのである。翁の一生を語るには、貿易に、工業に、政治に、市政に、多種多様で容易なことではない。私は單に學校長として、翁に接した片鱗を記述したに過ぎないのである。